

# Covid-19 による登校日数の減少が 大学生の友人形成と社会的スキルに与えた影響

栗津俊二

人間社会学部人間社会学科

## 要旨

Covid-19 状況下の大学では多くのオンライン授業が実施された。その結果、2020 年度には週に 1 日以下しか登校しない学生が半数近くになるなど、大学生の登校日数は大きく減少した。このような登校日数の減少が、大学生の友人形成と社会的スキルの成長に影響するかどうかを、2020 年度入学生に焦点を当てた調査によって検討した。2022 年の調査時点で 2020 年度入学生は、他年度入学生よりも友人との交遊経験が乏しく、友人数が少なく、社会的スキルが低かった。本研究は、大学生の登校日数が大きく減少することが、友人形成を妨げ、社会的スキルの発達も妨害することを示した。所属する教育機関における適切な人間関係の形成は、教育効果に関わる様々な要因にも影響する。教育のオンライン化について考えるとき、特定の授業の効果を検討するだけでは不十分であり、オンライン授業の割合や登校日数など、当該教育機関における学習者の経験全体を考慮することが必要である。

キーワード：Covid-19, オンライン授業, 友人形成, 社会的スキル, 大学生

## 1. 目的

2020 年は Covid-19 への対応として、世界中の多くの高等教育機関がオンラインでの授業を実施した。我が国でも、2020 年 4 月には約 9 割の大学で授業実施が延期され（総務省、2021）、遠隔授業の活用を求める文部科学省の通知も出された（文部科学省、2020）。2020 年 10 月頃には、受講する全ての科目がオンライン授業となった大学生が 26.5%、1 週間の登校日数が 1 日以下の大学生が 49.9% となり、平均登校日数も前年（平均 4.4 日）から減少して 2.0 日となった（全国大学生生活協同組合連合会広報調査部、2021）。この結果、オンライン授業が多すぎる、対面授業が少ないということが社会問題となり、2020 年 11 月には文部科学大臣が大学団体に対面授業の増加を要請する事態となった（日本経済新聞、2020）。

この事態はパンデミック対応に由来するものではあるが、大学生の登校日数が極端に減るとい

う、再現困難な状況を検討する機会とも見なせる。登校日数の減少は、大学での友人形成の困難という問題をもたらしたとされている。例えば2020年度入学生には、大学での友人が作りにくいという悩みを持つ者が多く生じた（全国大学生生活協同組合連合会広報調査部，2021）。翌2021年度には全てオンライン授業という大学生は11.9%と前年度から半減し、登校日数も、大学による差が大きいものの、平均2.8日/週となった（全国大学生生活協同組合連合会広報調査部，2022）。しかし2020年度入学生は、2021年度になっても、それ以前に入学した大学生と比べると友人が少なかった（ベネッセ教育総合研究所，2021）。では、登校日数がさらに回復した2022年度には、どうなったであろうか。2022年10月頃になると、全てオンライン授業という学生は1.2%にまで減少し、1週間の登校日数も平均3.9日まで増加した（全国大学生生活協同組合連合会広報調査部，2023）。これによって、2020年度入学生の友人数は増加したのだろうか。本研究の第一の目的は、大学生の登校頻度の減少が、友人形成に長期的な影響を与えたかどうかを検討することである。大学新入生の適応には友だちからの情緒的サポートが重要であり（Azmitia *et al.*, 2013）、友人関係形成の機会の確保という観点は重要である。何らかの事情によって一時的に登校頻度が減少しても、後日、友人関係形成の機会は取り戻すことができるのだろうか。

第二の目的は、登校日数の減少が、対人関係を築く能力の育成に影響したかどうかを検討することである。対人関係を築く能力は、一般に社会的スキルやコミュニケーションスキルと呼ばれる（大坊，2006）。両者は類似した概念であるが、対人関係に関わる能力を社会的スキル、そのうち言語、非言語による直接的コミュニケーションの能力がコミュニケーションスキルと考えられている（藤本・大坊，2007）。菊池（2007）では社会的スキルを、基本的スキル（会話の開始、質問、自己紹介など）、より高度なスキル（援助を求める、指示する、謝罪するなど）、感情処理スキル（自身の感情の表現、恐れへの対処など）、攻撃に代わるスキル（援助する、和解する、自己制御など）、ストレス処理スキル（難しい会話に応じる、失敗の処理、非難への対応など）、計画スキル（目標設定、決定など）の6つに分類し、これらを測定するKiss-18尺度を作成している。社会的スキルは、児童期においては友人との遊びの頻度や種類、遊ぶ人数などによって影響される（大畠ほか，2002；渡辺・佐藤，2005；野本・石野，2015；木下ほか，2017）。また大学生においても1年生よりも3年生の方が友人とのコミュニケーションスキルが高いなど成長が見られ（牧野，2012）、友人との交流経験によって向上すると考えられる。したがって登校日数の減少に伴って大学での友人形成の機会が減少すれば、社会的スキルが成長しにくかった可能性がある。

これら二つの目的を検討するため、2020年度入学生の友人関係と社会的スキルを、Covid-19以前に入学した2019年度入学生、対面授業がやや増加した2021年度入学生、そして対面授業がさらに増加した2022年度入学生と比較する。なお同時期には、非常事態宣言や外出自粛の呼びかけなども盛んになされていた。そのため、登校日数の影響だけを分離することはできない。本稿では「登校日数の減少」として論を展開するが、「登校も含めた外出頻度の減少」である可能性が高いことに御留意いただきたい。

## 2. 方法

### 2.1 回答者および調査手続き

2022 年 12 月 7 日～8 日に、オンライン調査会社を介して、インターネット上でのアンケート調査を実施した。調査会社への登録情報において年齢が 15 才以上および 20 代、職業が学生の男性 300 名、女性 300 名が回答した。

### 2.2 質問項目

アンケート調査では、まず入学年度と登校状況について尋ねた。Q1 として、大学への入学年度を「2018 年度以前」「2019 年度」「2020 年度」「2021 年度」「2022 年度」から選択させた。Q2 として、大学への登校状況について、「2018 年度（4 年前 コロナ禍以前）」、「2019 年度（3 年前 コロナ禍以前）」、「2020 年度（2 年前）」、「2021 年度（去年）」、「2022 年度（今年）」の各年度について「入学していない」「ほとんど毎日」「週に数日程度」「月に数日程度」「ほとんど登校していない」から選択させた。

次に、入学年次の友人関係について回答させた。Q3 では、1 年次の友人数について「大学に入学した年度中（1 年生の時）」に、下記にあてはまるような大学内の友人はどれくらいできましたか？」と尋ね、友人のタイプとして「授業や課題について会話できる友人」「大学以外の出来事について会話できる友人」「家族や自分自身などプライベートなことについて会話できる友人」「現在の悩みや将来の夢などを相談できる友人」「自分自身の深い悩みや家族の問題なども含めて、なんでも相談できる親友」をおいた。それぞれの友人タイプについて、その人数を「1：0 人」「2：1～2 名程度」「3：3～5 人程度」「4：6～9 人程度」「5：10 人以上」の 5 段階で選択させた。Q4 では、1 年次の友人との遊び経験について回答させた。「大学内の友人と 1 年生のときに、下記のような出来事をそれぞれどの程度経験しましたか」と尋ね、経験のタイプとして「大学に来ているときに、一緒に昼食を食べた」「大学に来ているときに、一緒に夕食を食べた」「大学とは関係なく、一緒に食事（飲み会含む）に行った」「大学とは関係なく、一緒に遊び（飲食以外が中心）に行った」「大学とは関係なく、一緒に旅行に行った」をおいた。それぞれの経験タイプについて、その頻度を「1：一度もしていない」「2：一度だけした」「3：数回した」「4：月に何回もした」「5：週に何回もした」の 5 段階で尋ねた。

続けて、2 年次以降の友人関係について回答させた。Q5 では、1 年次の友人関係が継続しているかどうか尋ねた。「大学内で 1 年生のときにできた友人とは、その後も定期的に連絡を取るなど友人関係が維持されていますか？」という質問に対し、「1：全く維持されていない」「2：ほとんど維持されていない」「3：どちらともいえない」「4：少しは維持されている」「5：維持されている」の 5 段階で回答させた。Q6 では 2 年次以降にできた友人数について尋ねた。「入学年度以降（2 年生以上の時）」に、下記にあてはまるような大学内の友人はどれくらいできましたか？」を尋ね、Q4 と同一の友人タイプについて、同一の選択肢で回答させた。

最後に社会的スキルについて回答させた。Q7 として、Kiss-18（菊池，2007）の 18 項目につい

て尋ね、それぞれ「1：全くあてはまらない」～「5：よくあてはまる」の5段階から選択させた。

### 3. 結果

#### 3.1 回答者の確認

本研究は、登校日数が減少した2020年度入学生の友人関係と社会的スキルについて、Covid-19以前である2019年度入学生、登校日数がやや増加した2021年度入学生、そして登校日数がさらに増加した2022年度入学生を比較するものである。そのため2022年度に「入学していない」を選択した50名と、入学年度が2018年以前の74名を分析から排除した。また、2019年度に「ほとんど登校していない」を選択した18名と、2022年度入学にも関わらず2021年度に大学への登校を回答するなど入学年度と通学状況が一致しない66名も、分析から除外した。最終的に、2019年度入学生71名、2020年度入学生78名、2021年度入学生88名、2022年度入学生155名の合計392名を分析対象とした。

#### 3.2 登校状況

表1に、各年度における登校状況（Q2）のうち、大学1、2年次の状況を入学年度別に示す。なお、2022年度入学生は調査時点で在学1年目であるため、2年次としての回答は存在しない。1年次の登校状況についてカイ二乗検定をおこなったところ、入学年度によって有意差が見られた [ $\chi^2(9) = 235.67, p < .01$ ]。調整済み残差による残差分析を行うと、2020年度入学生では、「ほとんど登校していない」および「月に数日程度」と回答した人数が多く、逆に「週に数日程度」と「ほとんど毎日」と回答した者が少なかった。また、2021年度入学生では「週に数日程度」が多く、「ほとんど毎日」が2019、2022年度入学生よりも少なかった。

表1 入学年度別の登校状況

入学年度		2019	2020	2021	2022	合計
1 年 次	ほとんど登校していない	<u>0</u>	<u>51</u>	9	<u>7</u>	67
	月に数日程度	1	7	6	3	17
	週に数日程度	<u>3</u>	<u>7</u>	<u>42</u>	41	93
	ほとんど毎日	<u>67</u>	<u>13</u>	<u>31</u>	<u>104</u>	215
	合計	71	78	88	155	392
2 年 次	ほとんど登校していない	<u>44</u>	13	<u>3</u>	—	60
	月に数日程度	7	<u>18</u>	<u>2</u>	—	27
	週に数日程度	10	27	15	—	52
	ほとんど毎日	<u>10</u>	<u>20</u>	<u>68</u>	—	98
	合計	71	78	88	—	237

※斜字は有意に多いことを、下線は有意に少ないことを示す

また、2 年次の登校状況についても入学年度によって有意差が見られた [ $\chi^2(6) = 128.58, p < .01$ ]。調整済み残差による残差分析を行うと、2019 年度入学生は 2 年次（2020 年度）には「ほとんど登校してない」者が多く、「ほとんど毎日」登校した者が少なかった。2020 年度入学生は 2 年次（2021 年度）には、「月に数日程度」「週に数日程度」登校した者が多く、「ほとんど毎日」登校した者は少なかった。2021 年度入学生は 2 年次（2022 年度）になると、「ほとんど毎日」登校した者が多かった。

### 3.3 入学年次の友人関係

表 2 に、1 年次の友人数に関する評定平均値を入学年度別に示す。2 要因混合計画の分散分析を行なったところ、友人タイプ別の主効果 [ $F(4,1552) = 130.52, p < .01, \eta^2 = 0.09$ ] と、大学入学年度の主効果 [ $F(3,388) = 2713.18, p < .01, \eta^2 = 0.05$ ] は有意であった。交互作用は有意でなかった [ $F(12,1552) = 1.57, p = .10$ ]。友人タイプの主効果について Tukey の HSD 法を用いた多重比較を行ったところ「授業や課題の会話」と「学外についての会話」をする友人間のみ評定値に有意差がなく、他の組み合わせは全て有意差が見られた ( $p < .05$ )。つまり、「学外について会話する友人」、「プライベートな会話をする友人」、「相談できる友人」、「親友」の順に評定値が小さくなった（人数が減少した）。大学入学年度の主効果について多重比較を行ったところ、2020 年度入学生と 2022 年度入学生の間に有意差 ( $p < .01$ ) が見られたが、他の組み合わせ間では有意差がなかった。

表 2 入学年度別 1 年次友人数

入学年度		2019	2020	2021	2022
授業の会話	mean	3.06	2.51	3.03	3.23
	SD	1.33	1.07	1.12	1.19
学外の会話	mean	2.93	2.60	2.78	3.17
	SD	1.16	1.35	1.30	1.25
プライベートな会話	mean	2.56	2.19	2.50	2.84
	SD	1.01	0.95	1.09	1.16
悩み相談	mean	2.24	1.99	2.20	2.49
	SD	0.89	0.89	1.00	1.03
親友	mean	1.94	1.83	2.09	2.16
	SD	0.73	1.02	0.94	0.99

1 年次友人との遊び経験に関する評定平均値を表 3 に示す。2 要因混合計画の分散分析を行ったところ、遊び経験タイプの主効果 [ $F(4,1552) = 180.92, p < .01, \eta^2 = 0.15$ ]、大学入学年度の主効果 [ $F(3,388) = 8.74, p < .01, \eta^2 = 0.03$ ]、交互作用 [ $F(12,1552) = 4.75, p < .01, \eta^2 = 0.01$ ] が全て有意であった。交互作用が有意なため、入学年度ごとに遊び経験タイプに関する単純主効果検定を行った。2019 年度 [ $F(4,385) = 30.48, p < .01$ ]、2020 年度 [ $F(4,385) = 8.83, p < .01$ ]、2021 年度 [ $F(4,385) = 25.79, p < .01$ ]、2022 年度 [ $F(4,385) = 74.75, p < .01$ ] のいずれも有意だった。各入学年度において、遊び経験タイプ間で Tukey の HSD 法を用いた多重比較を行うと、2019、2021、2022 年度入学生は、いずれも「大学で昼食」が他の項目よりも有意に評定値が大きく、「旅行」が

有意に小さかった。2020年度も同様に「大学で昼食」が他の項目よりも有意に評定値が大きかった。しかし、「旅行」と「夕食」間に有意差がなく、他の3項目とは有意差が見られた。次に遊び経験タイプごとに入学年度に関する単純主効果検定を行った。「大学での昼食」[ $F(3,388)=16.29, p<.01$ ], 「夕食」[ $F(3,388)=4.39, p<.01$ ], 「外食(飲み会)」[ $F(3,388)=5.56, p<.01$ ], 「飲食以外の遊び」[ $F(3,388)=5.58, p<.01$ ]では有意だったが、旅行[ $F(3,388)=1.54, p>.10$ ]は有意でなかった。遊び経験タイプごとに、入学年度間で多重比較を行ったところ、「大学での昼食」は2020年度入学生が他のどの入学年度生よりも少なかった。「夕食」「外食(飲み会)」「飲食以外の遊び」は2020年度入学生が2019, 2022年度入学生より少なく、2021年度入学生とは有意差がなかった。

表3 1年次友人との遊び経験

入学年度		2019	2020	2021	2022
登校して昼食	mean	4.15	2.68	3.53	3.95
	SD	1.29	1.74	1.54	1.38
登校して夕食	mean	2.73	2.05	2.33	2.65
	SD	1.30	1.28	1.35	1.50
食事・飲み会	mean	2.69	2.17	2.32	2.63
	SD	1.15	1.11	1.19	1.32
食事以外の遊び	mean	2.80	2.15	2.38	2.71
	SD	1.12	1.16	1.12	1.25
旅行	mean	2.04	1.67	1.78	1.75
	SD	1.14	1.04	1.06	1.20

### 3.4 2年次以降の友人関係

1年次の友人関係の維持(Q5)および2年次以降にできた友人数(Q6)における評定平均値を、入学年度別に表4に示す。なお、2022年度入学生は在学1年目であるため、回答が存在しない。1年次の友人関係の維持(Q5)に対して、一要因分散分析を行ったところ、有意な差がある可能性が見られた[ $F(2,234)=2.89, p=.06, \eta^2=0.02$ ]。入学年度間でTukeyのHSD法を用いた多重比較を行ったところ、2020年度入学生と2021年度入学生間に有意差が見られた( $p=.05$ )。

次に、2年次以降の友人数(Q6)に対して2要因混合計画の分散分析を行なった。友人タイプの主効果[ $F(4,936)=43.84, p<.01, \eta^2=0.05$ ]は有意だったが、入学年度の主効果[ $F(2,234)=0.38, p>.10$ ]と交互作用[ $F(8,936)=1.47, p>.10$ ]は有意でなかった。友人タイプ間で多重比較を行ったところ、「授業や課題の会話」と「学外についての会話」をする友人間にのみ評定値に有意差がなく、他の組み合わせは全て有意差が見られた( $p<.05$ )。つまり、「学外について会話する友人」、「プライベートな会話をする友人」、「相談できる友人」、「親友」の順に評定値が小さくなった。



表4 1年次友人の維持と2年次以降の友人数

入学年度		2019	2020	2021
1年次友人の維持	mean	3.65	3.29	3.76
	SD	1.24	1.40	1.21
授業の会話	mean	2.61	2.87	2.75
	SD	1.14	1.53	1.18
学外の会話	mean	2.52	2.69	2.57
	SD	1.18	1.38	1.12
プライベートな会話	mean	2.30	2.42	2.41
	SD	1.06	1.31	1.14
悩み相談	mean	2.10	2.08	2.26
	SD	0.99	0.94	1.12
親友	mean	1.97	1.91	2.17
	SD	0.89	0.91	1.23

### 3.5 社会的スキル

入学年度別の Kiss18 の平均得点を表5に示す。一要因の分散分析を行ったところ、入学年度の主効果が有意であった [ $F(3,388) = 2.64, p = .05, \eta^2 = .02$ ]。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行ったところ、2020 年度入学生は 2019 年度入学生 ( $p = .07$ )、2022 年度入学生よりも得点が低い傾向が見られた ( $p = .06$ )。

表5 社会的スキル得点

入学年度	2019	2020	2021	2022
mean	60.48	55.01	58.89	59.87
SD	13.79	14.03	13.24	13.87

## 4. 考察

2019 年度入学生も 2020 年度入学生も、2020 年度には登校日数が少なかった。また、2021 年度には 2020 年度よりも登校日数が多いが、「ほとんど毎日」登校していた者は少なかった。この結果は、全国大学生生活協同組合連合会広報調査部（2021, 2022）と一致している。本調査の回答者は、Covid-19 状況下における登校日数の影響を検討するのに、適切な標本と言えるだろう。

また、入学年度に関わりなく、1 年次でも 2 年次でも、授業や課題、また学外についての一般的な会話をする友人は多く、プライベートな話題や相談をする友人や、親友と呼べる友人は少なかった。これは人間関係の深さを反映した一般的な傾向であろう。しかし友人数を入学年度で比較すると、2020 年度入学生は 1 年次においては、どのタイプの友人も、少なくとも 2022 年度入学生より少なかった。さらに 2020 年度入学生は、元々他の入学年度生よりも少ない 1 年次の友人を、2 年次以降に維持することも困難であった。2020 年度入学生は、大学で友人と昼食を一緒にした経験が少なく、学外で飲食以外の遊びを友人とした経験も少なかった。加えて、2020 年度入学生は、Covid-19 対応以前、あるいは対応緩和以降の入学年度生よりも、社会的スキル得点がやや低い傾向が見られた。

したがって、Covid-19 状況下における 2020 年度の登校日数の減少は、2020 年度入学生が入学年次において友人と交友活動を行うこと、友人関係を形成すること、そしてその友人関係を 2 年次以降に継続していく妨げとなったことが確認された。一方で、2 年次以降の友人数については、入学年度の影響は見られなかった。したがって 2021 年度以降は登校日数が増えたことによって、2020 年度入学生にも友人関係形成の機会が増えた可能性もある。しかし 2020 年度の入学時における友人との活動や友人数の減少は、人間関係に関するトレーニングの減少へと繋がり、社会的スキル育成の障害となったと考えられる。

本調査は、Covid-19 状況下における登校日数の減少が、該当年度入学生の友人関係と対人スキルに与えた影響を検討したものである。2020 年度には、登校日数が週に 1 日以下の学生が約半分を占めた（全国大学生生活協同組合連合会広報調査部 2021）。これほどの登校日数の減少は、友人形成や社会的スキル成長の障害となると言えるだろう。一方で、2021 年度は週の登校日数が平均 2.8 日であるが（全国大学生生活協同組合連合会広報調査部、2022）、この程度ならば Covid-19 の影響がなかった 2019 年度と比較しても、明確な影響が見られないと考えられる。

本調査の結果は、登校頻度があまりにも減少すると、大学生の人間関係と社会的スキルの育成に影響する可能性を示した。適切な社会的関係の形成は、その教育機関自体への適応（Swenson *et al.*, 2008）、オンライン授業への内発的動機（青山ほか、2021）、オンラインでのメンバー間の情報共有（Tseng and Kuo, 2014）など、教育効果に関わる多様な要因にも影響する。教育のオンライン化、あるいは教育のデジタル・トランスフォーメーションを考える時、個々の授業のオンライン化による影響や効果を検討するだけでは不十分である。カリキュラム全体の中でのオンライン授業の割合や学生の登校日数など、その教育機関における学習者の活動全体も考慮することが必要である。

## 参考文献

- 青山郁子・家島明彦・戸田有一（2021）コロナ禍中での大学の遠隔教育における基本的心理欲求と内発的動機の役割. 日本教育工学会論文誌, 45: 193-196. doi:10.15077/jjet.S45091
- Azmitia, M., Syed, M., and Radmacher, K. A. (2013) Finding Your Niche: Identity and Emotional Support in Emerging Adults' Adjustment to the Transition to College. *Journal of Research on Adolescence*, 23 (4): 744-791. doi:10.1111/jora.12037
- ベネッセ教育総合研究所（2021）第4回 大学生の学習・生活実態調査報告書. <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail.php?id=5772>（参照日 2024.03.11）
- 藤本学・大坊郁夫（2007）コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15 (3): 347-361. doi:10.2132/personality.15.347
- 菊池章（2007）社会的スキルを測る：Kiss-18 ハンドブック. 川島書店.
- 木下雅博・大西彩子・森茂起 2017 遊びが子どもの社会的行動に与える影響—プレイフルネスと衝動制御に着目して—. 応用心理学研究, 42 (3): 209-219.



牧野幸志 2012 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係－同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差，学年差の検討－，経営情報研究：摂南大学経営情報学部論集，20（1）：17-32.

文部科学省（2020）令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）.

[https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt\\_kouhou01-000004520\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf)（参照日 2024.3.13）

日本経済新聞（2020）文科相「対面授業の積極検討を」大学4団体と協議（2020年11月19日）.

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO66404740Z11C20A1CE0000/>（閲覧日：2025年1月3日）

野本浩太郎・石野陽子（2015）小学校高学年児童における遊び能力と社会的スキルの心理学的研究．島根大学教育臨床総合研究，14：75-88.

大坊郁夫（2006）コミュニケーション・スキルの重要性．日本労働研究雑誌，48（1）：13-22.

大畠みどり・本田千尋・北原麻里子・津久井敦子・中山純子・根本喜代江・小林正幸（2002）児童期における遊びと社会的スキルの関連：遊びの種類と頻度の視点から．東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，26：111-126.

総務省（2021）令和3年版情報通信白書.

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/r03.html>（参照日 2024.03.11）

Swenson, L. M., Nordstrom, A., and Hiester, M. (2008) The Role of Peer Relationships in Adjustment to College. *Journal of College Student Development*, 49（6）：551-567.

Tseng, F.-C., and Kuo, F.-Y. (2014) A study of social participation and knowledge sharing in the teachers' online professional community of practice. *Computers & Education*, 72: 37-47. doi:10.1016/j.compedu.2013.10.005

内田知宏・黒澤泰（2021）コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業—心身状態とひきこもり願望—．心理学研究，92（5）：374-383. doi:10.4992/jjpsy.92.20076

渡辺広人・佐藤公代 2005 児童の遊びに関する研究－社会的スキル，向社会的行動，肯定感との関連について－．愛媛大学教育学部紀要，52（1）：61-78.

全国大学生生活協同組合連合会広報調査部（2021）CAMPUS LIFE DATA 2020: 第56回学生の消費生活に関する実態調査報告書．全国大学生生活協同組合連合会．

全国大学生生活協同組合連合会広報調査部（2022）CAMPUS LIFE DATA2021: 第57回学生の消費生活に関する実態調査報告書．全国大学生生活協同組合連合会．

全国大学生生活協同組合連合会広報調査部（2023）CAMPUS LIFE DATA 2022: 第58回学生の消費生活に関する実態調査報告書．全国大学生生活協同組合連合会．

# The Impact of Reduced School Attendance Due to Covid-19 on University Students' Friendship Formation and Social Skills

Shunji AWAZU

Department of Humanities and Social Sciences

## Abstract

During the Covid-19 pandemic, many university classes transitioned to online formats. Consequently, in the 2020 academic year, the number of days university students attended in-person classes decreased significantly, with nearly half of the students attending less than once a week. This study investigated whether this reduction in in-person attendance affected the formation of friendships and development of social skills among university students, particularly those who began their studies in 2020. The findings indicate that students who entered university in 2020 had fewer opportunities to interact with peers, fewer friends, and lower social skills compared to students who entered in other years. This study demonstrates that the frequency of in-person attendance influences the formation of friendships and development of social skills. Additionally, the establishment of appropriate human relationships within educational institutions impacts several factors related to educational effectiveness. When considering the shift to online education, it is essential to evaluate not only the effectiveness of individual classes but also the overall experience of learners at educational institutions, including the ratio of online classes to in-person attendance.

**KEYWORDS:** COVID-19, ONLINE LEARNING, UNIVERSITY STUDENTS, FRIENDSHIP FORMATION, SOCIAL SKILLS